

# テーテンス『人間本性とその展開についての哲学的試論』とカント

佐藤慶太

はじめに

「…彼の前にはいつもテーテンスが広げられています」——ハーマンは1779年5月17日、ヘルダーに宛てた書簡の中で、『純粹理性批判』（第一版1781、第二版1788：以下『批判』）<sup>1</sup>の執筆に取り組むカントの様子をこのように報告している<sup>2</sup>。カントの机上に広げられているものが、ヨハン・ニコラウス・テーテンス（1736-1807）の『人間本性とその展開についての哲学的試論』（1777：以下『試論』。略号PhV.）<sup>3</sup>であることは、ほぼ間違いがない<sup>4</sup>。既存の研究では『批判』における「心理学的演繹」の構造、「想像力（Einbildungskraft）」の概念、「知性（Verstand）と理性の区別」<sup>5</sup>、「経験的図式の理論」などにおいて、『試論』からの影響があるという指摘がなされている<sup>6</sup>。しかし、この影響関係の詳細が十分に明らかにされているわけではない<sup>7</sup>。本稿は、特に『批判』第一版の「超越論的演繹」（A95ff.：以下「演繹論」）に関して、テーテンスの認識論がカントにどのような影響を与えたのか、明らかにすることを目的とする<sup>8</sup>。

まず準備的考察として、テーテンスの基本的な立場を確認し、テーテンスがカントに影響を与える存在であったことを示す（Ⅰ）。次いで『試論』第一部で展開される認識能力分析を概観し（Ⅱ）、これを踏まえて、カントが『試論』の内容をどのように「演繹論」の内に取り込んだのか、考察する（Ⅲ）。

## Ⅰ 準備的考察—テーテンスはカントに影響を与えるか

『試論』の序論において、テーテンスはこの著作の目的を「人間知性の諸作用、その思考法則とその根本能力、さらには活動的な意志の力、人間性の根本性格、自由、心（Seele）の本性とその展開」（PhV. III）の解明に定め、そこで用いる方法の詳細について次のように説明している。

「私が用いる方法は、観察的な方法であり、ロックが知性に関して、またわれわれの心理学者たちが、経験的心理学（Erfahrung-Seelenlehre）において従っていたものである。心の変容を、それが自己感取（Selbstgefühl）を通じて認識されるがままにうけとる。これを丁寧にくりかえし、条件を変えながら認知し、観察し、心の変容の生成の仕方、それらを生み出した諸力の作用法則に注意を向ける。それから、観察の成果を比較し、分析し、そこからもっとも単純な能力、作用の仕方、それら相互の関係を探求する。これらが、経験に依拠した、心の心理学的分析における最も本質的な諸操作である。」（PhV. IV）

「観察」への依拠は、同時期に著された『一般思弁哲学について』（1775：以下『思弁哲学』。略号Sp.）<sup>9</sup>の冒頭でも明示されている（cf. Sp. 1）。さらにテーテンスは、この著作の中で「前もって感覚

のうちになかったものは、知性のうちにはない」という命題に、ライプニッツがつけ加えることを求めた「知性を除いては」（『人間知性新論』L. 2, C. 1. §. 2.）という制限は不要である。（Sp. 54 Anm.）とも述べている。

山本道雄はこれらを論拠として、テーテンスは「すべて一般的概念はその起源を感覚に持つ」と主張している、と解釈しており、「経験論的あるいは自然主義的方法論」を徹底したテーテンスと、『可感界と可知界の形式と原理』（1770：以下「教授就任論文」）の段階で既に「純粹観念」（II 394）の理論に到達していたカントとの間には根本的な立場の違いがある、とみなす<sup>10</sup>。このテーテンス理解からは、テーテンスがカントに与えた影響は本質的なものではない、という結論が引き出されるだろう。

この解釈はテーテンスの自己理解とは相容れない。『試論』においてテーテンスは「心（Seele）」の「能動性（Aktivität）」と「受容性（Receptivität）」という概念を軸に、自らの哲学的な位置づけを行っている（cf. PhV. 621）。一方に、ライプニッツ・ヴォルフ哲学の立場があり、彼らは心のあらゆる機能を能動的な表象能力から説明する。もう一方には、すべての心の機能を、洗練され、高められた感覚とみなす立場（ヒューム、サーチ（トゥッカー）、ヘルヴェティウス、コンディヤック、ボネなど。いわゆる感覚論。）がある。テーテンスは、この二つの立場の中間に自らを位置づけ、能動性と受容性の両方を根本的な規定とみなすのである（cf. PhV. 4ff.）。後に詳述するが、一方においてテーテンスは感覚に独自のステータスを付与することによってライプニッツ・ヴォルフ哲学を批判し、他方において想像力および知性の能動的な働きを裏付けるという仕方で、コンディヤックらに対して論陣を張るのである<sup>11</sup>。

それでは上述の、ライプニッツについてのコメントはどのように理解すべきであろうか。このコメントの前後を視野に入れることによって、テーテンスの意図するところを見届けよう。

「思考すること（Denken）の概念、そして知性の概念の起源であるわれわれの思考活動、思考の仕方についての感取（die Gefühle von unsern Denkhätigkeiten und Denkart）も、内的な感覚に属している。だから、「前もって感覚のうちになかったものは、知性のうちにはない」という命題にライプニッツがつけ加えることを求めていた「知性を除いては」（『人間知性新論』L. 2, C. 1. §. 2.）という制限は不要である。空間の概念に関して言えば、もちろんわれわれはそれを、外的感覚——ただし、これが、外的諸対象によって心の中に引き起こされる個々の変化、印象であるかぎりにおいて——からの抽象を通じて手にするのではない。そうではなくて、われわれはそれを、並存する多数の諸物を感覚する作用（Actus）、特に触覚と視覚の作用に基づいて、手にするのではないだろうか？」（S. 54 f. Anm.）

この箇所の後でテーテンスは、カントが「教授就任論文」で述べていることは、これと同じことなのではないか、と述べている。後述するようにこの理解は正しいとはいえないが、少なくともこの箇所から、テーテンスが質料的な感覚と、作用を区別していることが読み取れる。ここでテーテンスは、心の作用にアクセスする手段は、「感取（Gefühl）」であり、これはその所産として、内的感覚に属するものをわれわれにもたらす（「内的自己感取の感覚（die Empfindungen des innern Selbstgefühls）」（PhV. 385）、それゆえに、心の作用に由来する概念の確保も、観察という方法と齟齬をきたさない、ということをおうとしているのである。

注意しなければならないのは、観察という方法を採用することが、即座に、「基礎概念はすでに感覚の中に含まれている」という主張に直結するわけではない、ということである<sup>12</sup>。テーテンスは、観察に基づく「推論（Raisonnement）」を容認する（cf. PhV. XXIX）。感取は認識能力の活動性そのものを捉えることはできず、その働きの結果だけに関わるので（cf. PhV. 174）、そこから推論によって能力の活動性にアプローチしていくほかはないのである。

その結果、テーテンスは観察の成果を超えたものの存在を認める。例えば、理性の所掌とすべき一般判断（これについては後述する）について、それは「われわれ自身の思考の仕方の観察」によって捉えられるが、「この判断自体は、観察でも、観察から抽象されたものでもなく」、「思考の仕方の本性に依存している作用」（PhV. 469）であると述べられている。

テーテンスの立場をこのように解釈することは、カントのテーテンス理解ともかみ合う。テーテンスが「基礎概念はすでに感覚の中に含まれている」と主張していたとすると、次のような「プロレゴメナ準備草稿」におけるカントの文言をどう理解すればよいのかわからなくなってしまふ。

「それゆえ評者〔sc. いわゆる「ガルヴェ・フェーダー書評」の評者〕は、けっしてこのようなア・プリオリな認識の可能性について——テーテンス氏が彼に機縁を与えることができたのであるにもかかわらず——熟考しなかったのである。」（XXIII 57）

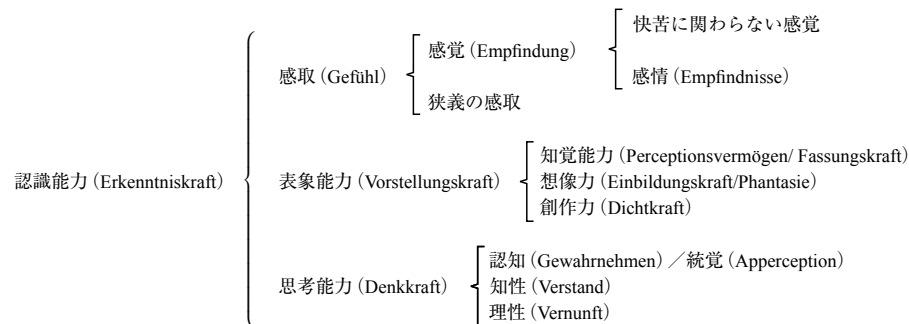
以上の読解から、カントとテーテンスが〈感覚に還元されない心の能動的な働きを捉える〉という狙いを共有していたことが分かる。本稿ではこれを前提として、両者の思索がどこで重なり合い、またどこでずれていくのか、考察する。

## II テーテンス認識論の基本構図

### 1 テーテンスにおける認識能力の全体像

先に説明したように、テーテンスは人間の心を「能動性」と「受容性」という二つの概念によって説明する。さらに細かい区分として、感取 (Gefühl)、知性 (Verstand)、意志 (Wille: これは活動性 (Thätigkeit) とも言われる) という三区分がなされる (cf. PhV. 625)。認識能力に限定した場合 (意志を除外した場合)、知性は表象能力と思考能力に区別され、感取、表象能力、思考能力という区分がなされる。これらの認識能力は、心の能動性、受動性のどちらかに帰属するわけではない。能動性と受容性は「非常によく混ぜあわされ、非常に緊密に触れあい、絡み合わされているので」、「心が感じたその瞬間に、心にとって存在するもの…が、両者のうちのどちらなのか、見分けるのは難しい」(PhV. 176) とテーテンスは述べている。このように能動性と受容性は二つの能力というより、二つの側面である。それゆえカントの感性と悟性の区別をここに投影させると、テーテンスの認識論の特徴を見誤る可能性がある。

さて、『試論』第一部の考察の対象となる認識能力は、以下のように区分されている。意志を含めて全体を見る場合に知性として一括されていた部分には、表象能力と思考能力が属している。認識の局面を細かく見ていく『試論』第一部の考察では、表象能力と思考能力が区別され、以下のような枠組みで考察が進められる。



テーテンスは、認識能力の区分について「自然の多様を人工的に区分するどんなやりかたも、普通は欠陥を持つし、持たざるを得ない」(PhV. 26)と述べており、これらの区分をあまり厳密に取りすぎることによしとしない。例えばテーテンスは、感覚と表象能力とを、連続するものとしてとらえており、ここで心の能動と受動が表裏一体をなしているとみなす(cf. PhV. 611f.)。

これらの叙述に基づいて、テーテンスにおいてすべての認識能力が連続的なものとされている、とする解釈もある<sup>13</sup>。だが本稿では、テーテンスが、ヴォルフ学派と感覚論の中間に自らを位置づけていること、そして例えば、思考能力が「人間の認識能力の、三つ目の単純な(einfach)構成契機」(PhV. 298: 傍点部筆者)と規定されていることから、『試論』で取り扱われるそれぞれの認識能力の間には、一定の質的差異が設定されていると理解する。

## 2 『試論』の構成

『試論』は二部構成で、全体で1618頁になる大著である。カントはある書簡の中で、『試論』を「書いたものをそのまま出版させた」、「著者も読者も疲労困憊させる」(X232)書物と評したが、このことは「口述(Diktate)を出版した」<sup>14</sup>というこの著作の成立の仕方にも由来するのだろう。しかし、この著作が構造を欠いているわけではない。ハウザーが指摘していることだが<sup>15</sup>、『試論』の全体は、ヴォルフによる経験的心理学と合理的心理学の区分<sup>16</sup>に基づいて構造化されている。全体は十四の試論からなるが、第一から第十試論まではヴォルフにおける経験的心理学のテーマに、第十一から第十四試論までは合理的心理学のテーマを取り扱っている。また、第一から第十試論までは、感覚の受容から理性的思考へという、ヴォルフの経験的心理学の叙述の仕方を踏襲している<sup>17</sup>。

## Ⅲ 各認識能力について<sup>18</sup>。

ここからは『試論』第一部の論述に即して、それぞれの認識能力の働きを詳しく見ていくことにしたい。カントと関連するもので、そのつど言及が可能なものは本節の文脈の中で述べる。「演繹論」における「三重の総合」に関する影響関係は、テーテンス認識論の全体構造を踏まえたくて検証するほうが分かりやすいため、次節で取り扱う。

### 1 感取(Gefühl)

認識のプロセスの端緒は広義の「感取(Gefühl)」(cf. PhV. 167f.)である。これの下位区分として「感覚(Empfindung)」と狭義の「感取(Gefühl)」がある。感覚は、客観を志向するが、感取は「われわれの内では起こる変化、われわれへの印象」を、それらを引き起こした客観を捨象して捉えること(cf. PhV. 167f.)とされ、この点で両者は区別される。狭義の感取の特徴は、①現在の、②絶対的なもの(das Absolute)〔⇔関係的なもの(das Relative)〕に、③受動的に関わることである(PhV. 165ff.)。感取の射程は、外的感覚の局面に限定されるものではない。上述のように、これは『試論』の観察の方法を支える認識能力であり、「思考」の成立にも関与する(後者については後述)。感覚は、「快適な、あるいは不快な感覚」と、快不快に関わらない感覚に区別され、前者が「感情(Empfindnisse)」と呼ばれる(PhV. 205)。本稿では、認識のプロセスに焦点を絞るので、感情については取り上げない。

「感覚」には二つの側面がある。第一に、それは外的あるいは内的な印象を受け取るとともに、心のうちで生じた変容を感取する。しかし感覚はもっぱら受動的ではなく、変容をこうむると同時にそれにたいして反応する能力も有している(cf. PhV. 609)。この反応とは、感覚を表象として保持する働きで、「知覚(Perception)」と呼ばれる(PhV.167)。ここで保持されたものは、「感覚表象(Empfindungsvorstellung)」、「残留表象(Nachempfindung)」と呼ばれるが、前者は感覚との関係において形成される根源的な表象のこと、後者は感覚の最中に心のうちに生じ、維持される原初的な感

覚表象のことである (cf. PhV. 23)。以上のように、感覚は表象能力と連続しているものの、それとは別の能力として取り扱われる。この点に感覚を「混濁した表象」として位置付けるライプニッツ・ヴォルフ哲学からの離反を見ることができる<sup>19</sup>。

## 2 表象能力 (Vorstellungskraft)

感覚を基礎として発動するのが表象能力である。これは、知覚能力、想像力、造形的創作力の三つに区分される。まず知覚能力が、感覚に基づいて根源的な表象(「感覚表象」)を心のうちに受け取り、この表象を保管する。次いで想像力が、最初の感覚が止んでしまったあとで、この表象を再生する。この再生された表象が、「再表象 (Widervorstellung)」、特に外官に由来するものが、「想像 (Einbildung/Phantasma)」と呼ばれる。想像力は、表象を再生する際、感覚において成立していた秩序を復元しようとする。このとき想像力が従うのが観念連合の法則(「表象は、それらのかつての結合、それらの類似性に即して、順を追って、再び呼び起される」という法則)である (PhV. 106f.)。しかし、表象能力の権限は、単に感覚における秩序を復元することに限定されない。表象能力は、かつての秩序を変更することもあれば、感覚から取り出された材料をもとに、新たな表象を作り出すこともある。こういった働きをなすのが「造形的創作力」である。創作力は、「自己活動的な想像力」(PhV. 107) と言い換えられる。造形的創作力は、カントの想像力論とも関係が深いので、次のセクションで、この能力が主題化される部分の論述を詳しく追ってみたい。

## 3 造形的創作力 (die bildende Dichtkraft) と感性的抽象体 (sinnliche Abstrakta)

「造形的創作力」は「感覚表象の材料から、新しい単純な表象を造形する能力」(PhV. 115) と定義される。第一試論第十五節「造形的創作力について」(PhV. 115ff.) において、テーテンスはいわゆる連合心理学(ボネ、コンディヤック等)に抗して、造形的創作力の能動的な作用を裏付けようとしている。

ここで「単純な (einfach)」がキーワードとなる。テーテンスによれば、連合心理学者は「創作すること (Dichten) を、感覚において受け入れられ、再び引きだされた表象のたんなる分解と再結合によって定義している」(PhV. 116)。この場合、心はパーツとしての表象の組み替えに終始する(=「単純な」表象をそれ自身では供給できない)ので、表象能力は受動的な働きしか果たしていない、ということになる。単純な表象の造形可能性の確保が、表象能力の能動性を裏付けることにつながるのである。

テーテンスは、「造形的創作力」は単純な表象を作り出せるという立場をとるが、これは本来の意味で単純な表象ではない、という留保も付け加えている。人間が作り出すことができるのは、人間による事後的な分析において明晰判明な部分表象へと分解できないような、疑似的な「単純な」表象である。しかし疑似的とはいえ、これが人間にとってなしうるかぎりでの「単純な」表象である。

「それ [= 造形的創作力] はわれわれの意識にとって単純な表象を作り出すことができる。それは作り出されたものであるにもかかわらず、われわれがもっとも単純な感覚表象として出会うどの表象とも似ていない。それゆえ、その能力はこの観点において、新しい単純な表象を造形することができる。」(PhV. 25f.)

では、連合心理学者批判の議論を辿ってみよう。テーテンスの解釈によれば、連合心理学者は、例えば「ペガサス」の造形を、感覚から入手した「馬」と「翼」の像を、ほかの表象から分離し、相互に結び付けて、ペガサスという創造物をつくることとして理解している (cf. PhV. 116)。ここでは分離と合成だけが原理である。

テーテンスは馬と翼の接合部に着目して、この考えを反駁する。いわく、「馬の肩に接している〔翼の〕像のある場所は、翼が〔馬の〕胴体のところに接している残りの場所よりも曖昧 (*dunkel*) である。そこでは、馬の肩の像と、翼の付け根の像とが相互に入り混じっている」(PhV. 118)。すなわち、分離と合成には尽きないもの、すなわち単純な表象の形成がそこで起こっている、というわけである。

テーテンスは造形的創作力に固有の所産として、「感性的抽象体」を挙げる。これは、概念が成立する以前の段階で出来る一般的な表象である。われわれが「木の葉」を表象する場合、そこにはいくつかの特徴 (*Zug*) が含まれている(形や色や動きなど)。木の葉の「緑」という特徴は、まさにそれを捉える瞬間に、それがこの木の葉における他の表象と分離されて、木の葉とは別の対象のうちに含まれている類似の特徴と結び付けられる、という仕方では成立するのではない。「緑」という特徴が際立つためには、すでに同様の表象が一つに統合されている必要がある。もちろん、具体的に存在するもろもろの「緑」には、濃淡の差があり、全く同じものはありえない。しかしこれらの差異性を同種性が凌駕することによって、もろもろの「緑」の表象が統合され、感性的なレベルでの一般的な表象が成立する。この前提がなければ、木の葉を表象する際に、その「緑」を他の特徴から分離して取り出すことはできない(cf. PhV. 131)。

この一般的な表象が、感性的抽象体であり、「創作力の真の創造物」(PhV. 132)といわれる。創作力の所産とされるのは、それが、類似の基礎的印象からの抽象によって生じた「それ自身において形成された単純な表象」(*ibid.*)だからである。テーテンスは感性的抽象体の代表例として「一般的な幾何学的表象」(*ibid.*)を挙げている。一般に感性的抽象体は、根源的な感覚表象に匹敵しえない「感性的な仮象 (*sinnliche Scheine*)」(*ibid.*)であり、具体的な事物に根拠を持つとはいえ「それ自体としては単に、諸性質の不完全な表象」(PhV. 133)にすぎない。それゆえ心は、感性的抽象体を表象する場合に、感性的抽象体のもとになった感覚表象の全体への関連付けを行う必要があるのだが、幾何学的概念のような安定性を確立した表象は、それ独自のステータスを確保することがありうる(cf. PhV. 134)。

感性的抽象体の理論は、近世哲学における幾何学的概念のステータスをめぐる論争における新たな展開として理解される。近世哲学において、観念の理論の類型化を試みるならば、観念の本質を像として捉えるか(ロックをはじめとする経験主義)、観念の本質から像的性質を排除するか(デカルト、ライプニッツなどの合理主義)という指標によって、一つの境界線を引くことができる。デカルトの『省察』における一つの目的は、明晰判明な認識が、想像力の徹底的な排除によって成就するというのを、アリストテレス主義の認識論に抗して裏づけることにあった。ライプニッツもまた、観念の本質を、分析によって確保される「定義」とみなした<sup>20</sup>。だが、このような立場に立つと、幾何学的概念の本質を捉えそこなうことになる。カントが前批判期から指摘しているように(cf. II 375ff.:「空間における方位決定の第一根拠」)、それらの間の差異が、概念のみでは捉えられず、空間に即してはじめて捉えられるもの(例えば右手と左手、或る物とその鏡像)が存在するのであるから、感性的なものを排除して幾何学的概念を成立させることはできない。一方で、経験主義における抽象観念の理論をとった場合でも困難が生ずる。例えばロックの場合、観念はあくまでも感覚から与えられた与件を基礎として構成される。それゆえ、観念はどれほど一般性が高まったとしても、像的性格を保持していることになる。とすれば「三角形の一般概念」は、「斜角でも直角でもあってはならず、等辺でも二等辺でも不等辺でもない」三角形、「それらすべてであると同時にどれでもないものでなければならぬ」、「存在できない不完全なもの」ということになる<sup>21</sup>。パークリはロックのこの議論を受けて、三角形の一般観念の成立のメカニズムを「それ自体として特殊とみなされる観念が、同種のすべてのほかの観念 (*all the other particular ideas of the same sort*) を代

表し、それらの代わりをさせられることにより一般的になる」というように説明した<sup>22</sup>。だがパークリの解決の仕方にも問題はある。杖下が適切に指摘しているように、パークリが行っているのは「あくまでも事実の叙述」であり、さらに問うべきはこのような代表作用の可能性の制約である。パークリの説明中にある「種 (sort)」とはそれ自体、一般的なものであり、複数の対象が同種とみなされる時点で、この操作には一般的なものが前提されてしまっている<sup>23</sup>。

幾何学的概念をめぐるこの議論を袋小路に追い込んでいるのは、「像」と「一般性」における排他的選言の関係である。テーテンスは、感性的抽象体の存在を、それに対応する固有の能力（造形的創作力）に基づいて裏付けるが、これによって、像でも、像から切り離された一般的なものでもない、両者の媒介者を登場させることができるのである。

「いま私がある三角形について思考し、私が求めるかぎり、この表象を私のうちに現前させておく際、…私は、かつて見た図形のかわりに、いままで一度も見られていない三角形の形態を、私の頭の中でみずから作り出したのである」(PhV. 134)

カントが「三角形の図式」について次のように述べるとき、そこには、テーテンスにおける感性的抽象体の理論からの明らかな影響が認められる。

「…私たちの純粋な感性的概念の根底に潜んでいるのは、その対象の像 (Bilder) ではなく、図式である。三角形の図式は思想のうち以外のどこにも現存することはできず、空間における純粋形態に関しての、想像力の総合のある規則を意味する。」(A141/B180)

もちろん幾何学的概念に関する両者の考えを安易に同一視することはできない。純粋直観の理論を持たないテーテンスは、感性的抽象体を「不完全な (unvollständig) 表象」(PhV. 133)、「混濁 (Verwirrung)」(PhV. 132) といった語を用いて特徴づけるほかはない。またカントの場合、「想像力」は「総合」を可能ならしめる要素であるため、幾何学的概念は「想像力の総合のある規則」という独特の性格を持たされることになる<sup>24</sup>。しかし、幾何学的概念のステータスを創作力との関係で明らかにするというテーテンスの発想がカントに影響を与えていることは、おそらく間違いないだろう。

#### 4 思考能力 (Denkkraft)

表象能力の働きを踏まえて、思考能力が発動する。テーテンスはこの二つの能力を架橋する契機として、「関連 (Beziehung)」、「関係 (Verhältnis)」についての感取を挙げている。すでにみたように、感取は「絶対的なもの (das Absolute)」のみに関わる。それゆえ、関連、関係の感取は、これら自体を捉えるのではない。例えば、外的事物における関連、関係に関して言えば、心が複数の「感覚表象」の間を行き来すること、すなわちこの「移行 (Übergang)」を感じ取ることが、関連、関係の感取なのである<sup>25</sup>。ここにおいて心に新しい変容が生じ、「認知 (Gewahrnehmen)」が成立する (cf. PhV. 191ff., 606ff.)。「認知」とは、「何かに注意すること (bemerken)、ある事象を意識すること」であり、「ある対象を、特定の対象として」捉えることである (cf. PhV. 262)。認知は、「統覚 (Apperception)」(ibid.) とも言い換えられる<sup>26</sup>。ある対象を特定の対象としてとらえることは、区別することを前提としている。それゆえここでは、感取のレベルにおいて、絶対的なものという形でとらえられていた関連、関係が、本来の意味での関連、関係として捉えなおされることになる。

テーテンスは、認知において「ある種の判断」が生じる、と述べる。認識における関係の成立を「判断」というタームで特徴づける考え方は、カントの判断理論と同一の方向性を持つ。しかしテーテンスは、当時の論理学の枠組 (概念・判断・推論) に準拠して「判断」を理解しており (cf. PhV. 274)、「判断」はその構成要素である「観念 (Idee)」なしでは成立しえない、とも述べている。「観念 (Idee)」とは、「識別され、認知された表象」(PhV. 300) と規定されるもので、認知のあとに成立す

るものであるから、認知を、本来の意味での「判断」と呼ぶには不適切である、というわけである。このようなテーテンスの「判断」の用法に、伝統的な判断論からカントの判断論へ至る展開の過渡的段階を見出すことができる。

「認知」は、思考能力の最初の発動とみなされるが、思考能力そのものではない。思考能力は、「関連と関係を認識する能力」と定義される (PhV. 296)。認知の次の段階として、思考能力が発動する。また、この段階において「概念 (Begriffe)」 (= 「一般的な観念」 (PhV. 299)) が成立する。この段階で概念が成立するのは、認知に思考能力が付け加わると、共通なもの、類似したものが、関係性に基づいて捉えられるからである。この段階において、物についての概念のみならず、関連、関係についても概念が形成される。テーテンスはこれを「関係概念 (Verhältnisbegriffe)」と呼ぶ。その成立のプロセスは、思考作用の発動を感取がとらえ、さらにそこからこの作用についての表象が成立し、これにもとづいて関係概念が確保される、という仕方でも説明される (cf. PhV. 307ff.)。すなわち、関係概念とは、思考の作用の仕方を反省的に捉えたものであり、位置づけとしては、カントにおける「カテゴリー」に対応する。

「関係概念」を提示するに当たって、テーテンスはライプニッツに依拠する。ライプニッツは『人間知性新論』において、関係を「比較 (comparaison)」と「協働 (concoirs)」に分けている。前者は、一致、不一致に関わり、後者は、原因と結果、全体と部分、位置と秩序という「連繫 (liaison)」に関わる (PhV. 330f.)<sup>27</sup>。ただしテーテンスは、全体と部分、位置と秩序の関係 (テーテンスの用語では「共存 (Koexistenz)」) と因果関係を一まとめにすることには異論を唱えており、関係概念は三種類に区分されるべきだと述べる。つまり、「関係概念」は①同一性と差異、②内属、実体と属性、結合、分離、同時存在、系列、秩序、共同作用、③依存、根拠と根拠付けられたもの、原因と結果、という三種類に区分される。

関係概念が思考の作用の仕方の表現であるがゆえに、そこには不可避的な必然性がある。それゆえ関係概念は、理性の「公理」、「一般的判断」とも重なる。テーテンスは「人間知性 (Menschenverstand)」と「推論する理性 (die raisonnierende Vernunft)」を区別する。前者は、「直接的に、表象相互の対照に基づいて、諸事象について判断を下す」能力であり、後者は「一般的な概念からの顕著な展開」、「これらの概念に基づく推論」を行う能力として規定されている (cf. PhV. 520)。理性は、感覚に由来する表象に関する操作に自らを限定せず、一般性 (Allgemeinheit) の領域で活動し、場合によっては感覚できないものにまで、一般的概念や推論を通じて到達しようとする。この活動を行う際に理性が準拠するのが、理性の「公理」、理性の「一般的判断」である。テーテンスは、この種の判断の形式として、①矛盾律、排中律、同一性と差異の法則、②共存関係 (Koexistenzrelationen) あるいは非作用的関係 (die unwirksamen Beziehungen) の原則、③因果関係および依存性についての一般的法則、の三種を挙げている (PhV. 512f.)。これは、先にみた「関係概念」の三区分別に対応している。別の箇所でもテーテンスは、これらの一般的判断が、「あらゆる経験に先行する (vor aller Erfahrung vorher)」 (PhV. 321) と述べている。この特徴づけは、テーテンスを徹底した経験主義者とみるならば奇妙に思われるだろうが、感覚内容に依存しない思考能力の作用に基づいて「関係概念」が取り出されたことを念頭に置かなければ、その思いなしも拭かれる。関係概念と感覚は、形式と質料の関係として捉えられるものなのである。

「…感覚、あるいは厳密に言うならば、感覚表象は、あらゆる思考 (Gedanke) の、あらゆる知識の究極の素材である。しかし、感覚はまた、そのための素材あるいは質料以上のなにもものでもない。思考、そして知識の形式は、思考する能力の働きである。これが職工であって、その限りにおいて、思考の創造者である。」 (PhV. 336)



## 5 客観の理論

テーテンスは、観念が外的な物にその根源を有すること、すなわち観念が客観的で実在的なものを表すためには、思考能力の関与が必要であるという。「ある表象が外的な客観を表している」という判断が成立するためには、「物 (Ding)」、「現実的な物」、「外的な物」という一般的表象があること、「私たちの自己 (Selbst)」、「私たちのうちにある事象」とそれが区別されることが必要である (cf. PhV. 344)。テーテンスは、表象の客観性の最も基礎的な要件である「物」の概念の成立を、「私／自我 (Ich)」の一性の成立と相関的なものとして捉えている。以下では、第五試論「諸物の客観的現実存在についてのわれわれの認識の根源について」の第五節における、上述の相関関係の裏付けを少し丁寧に追っていきたい。

例えば私が、目の前の何か小さな像を見るとき、わたしはそれを「一目で (mit Einem Blick)」、「私の直観で完全に (ganz)、包括する」。この感覚は、その内部にさらに小さな要素を含んでいるかもしれないが、しかし私にとっては「意識における、一にして同一の作用」である。それは「感覚における、ひとつの統一された全体 (ein vereinigtes Ganze)」である (PhV. 389)。この全体の内部で、さまざまな特徴 (Zug) が区別され、それにより、当該の対象がほかの物から区別されて確認される。ここで成立する全体と特徴の結合が、「全体のうちに特徴が含まれている」という関係概念を惹起し、「物」と「性状」という共通概念を成立させる (PhV. 390)。

この全体である「一つの、特殊な全体的感覚 (Eine besondere ganze Empfindung)」 (PhV. 390) は〈図〉である特徴の供給源として、あくまでも〈地〉である。この全体的感覚を、特徴の抽出によって汲みつくすことは不可能であり、それは「曖昧なる (dunkel)、解体不可能な地盤」 (PhV. 391) であり続ける。

この全体と部分の関係の成立は、自我の同一性のそれと相関的である。この相関性の裏付けは、「自己」を「互いに異なる諸知覚のかたまり、あるいは集まり」<sup>28</sup>とみなすヒュームに対する批判を通じてなされる。ヒュームがこの説を唱え得たのは、感覚のメカニズムの基礎にある、全体と特徴の関係を見落としており、意識がとらえる特徴のみによって、認識の成立を理解しているからである。私になんらかの形象の特徴を取り出して認識する際、その背後には取り出された特徴の「曖昧なる (dunkel) 根拠」が存している。このような背後に存する全体は、「私」の認識能力が包括したものであるから、「自我 (Ich)」は「諸知覚の集まり」ではありえない。また、この現在の全体的感覚と相関的である自我についての感取と、過去の類似の感取との比較に基づいて、「私たちの自我の同一性の概念」も確保されうる、というわけである (PhV. 392ff.)。

以上のような「物」の概念の確保は、「現実的な物」の概念の確保に直結する。というのも、テーテンスにおいて「現実的」とは「感取され、感覚される」ことを意味するからである (cf. PhV. 395)。さらに、ここに「原因についての未展開の概念」が付け加わることによって、「外的な物」の概念が獲得される (PhV. 397f.)。このように、客観の概念は、「自我」と関係概念 (同一性と差異、全体と部分、因果関係) の成立と連動する形で、確保されるのである。

## III カントのテーテンス理解

ここからは、特に『批判』第一版の「演繹論」における「三重の総合」の論述に焦点を絞って、カントがどのようにテーテンス哲学を摂取したのか、明らかにしよう。

### 1 カントとテーテンスの考え方の相違

まず、前節までで確認したテーテンスの認識論の枠組みとカントのそれとの間の差異を確認しておくことにしたい。カントとテーテンスの考え方の相違は、(1) 概念 (あるいは判断) についての

理解、(2)認識の成立における「総合」という契機の有無<sup>29</sup>、(3)空間・時間についての理解、の三点にあると考えられる。

(1)すでに見たようにテーテンスは、当時の論理学の枠組(概念・判断・推論)に準拠して「判断」を理解しており(cf. PhV. 274)、「判断」はその構成要素である「観念(Idee)」なしでは成立しえない、とも述べている。たしかに、「認知(Gewahrnehmen)」のステージで、ある対象を特定の対象を捉える際に「ある種の判断」が働いている、と述べるが、ここでも問題になっているのは、その対象と他の対象との関係性であって、あくまで概念は判断の構成要素という役割しか持たない。

カントは概念と判断の関係を、テーテンスのように考えてはいない。カントにおいて概念とは、徴表を部分とする全体である(cf. IX58, 59)。たとえば「物体」という概念は、この名辞に関係づけられる「延長」「可分割性」「不可侵入性」「硬さ」等々の徴表によって構成される全体のことを言う。それゆえ概念は、(少なくとも一つの)主語名辞とその徴表との関係を通じて(S ist Pの形で)表現されるものでなければならない。そして概念は「使用」という局面において、「判断」という仕方で働く、と考えられている。「概念の使用」はつねにある概念(A)がその徴表(B)を介して、対象(C)に関わる、という三項関係のもとで理解されている(この場合、徴表(B)は、対象(C)の徴表でもある)。要するにA ist Bという判断を下すことが同時に、ある概念(A)と対象(C)との関係を確保することなのである。それだからこそ、「概念の使用」が〈対象への関係〉によって説明される場合がある一方で(cf. A238/B298)、「知性は、それを通じて判断を下す、という以外の仕方で概念を使用しえない」(A68/B93)という主張がなされうるのである<sup>30</sup>。

(2)以上のこととも関連するのであるが、テーテンスには、「総合」によって認識が成立する、という発想は、基本的にはない。「基本的には」というのは、カントの「総合」との類似性を見出しうような叙述がないわけではないからである。例えば先に確認した「物」の概念の成立と自我の同一性の相関についての論述には、思考能力の作用に基づく認識対象の総合というカントの考え方との類似を読み取りたくなる。だが基本的にテーテンスは、印象の受け入れ、表象の形成、概念の成立という発生論的な考え方で認識のプロセスを説明しているので、やはりカントとは区別されるべきであろう。

(3)先にも少し触れたが、テーテンスは、カントの「教授就任論文」における空間・時間論に肯定的なコメントをしているが(cf. Sp. 55Anm., PhV. 359f.)、カントのアイデアをそのまま受け入れているわけではない。テーテンスは、手を使って空間中に円を描く、という行動を例に取り上げて、ここで行われている行為が「様々な部分からなりたつ、一つの全体的な作用(ein ganzer Aktus)」(PhV. 359)であると述べる。この作用に基づいて、感覚の統一された全体が知覚され、それが空間の観念へと仕上げられる。テーテンスは「教授就任論文」のカントが、「並列的に共に存在する事物を秩序つける、ある本能的な仕方」を空間であると言った、と理解したうえで、空間の観念は、「様々な感取を一つの全体へと統一する(die mehreren Gefühle zu Einem ganzen vereinigen)」[作用(Aktus)]ではなく、「その成果(Wirkung)」なのだ、と反論する(cf. PhV. 360)。その上で、カントが「外的感覚の基本的形式」としてとらえた「全体としての空間」の成立を、次のように説明する。

「個々の諸空間、諸時間の観念から、空間、時間の共通概念が成立する。そしてそこから、一つの全体的な、すべてを包括する無限の空間、一つの無限の時間の共通概念が成立する。」(PhV. 360)

テーテンスは「空間」の成立に、認識能力の作用が制約として関与していることは認めるものの、カントがみとめるような(概念と区別される限りでの)空間・時間の特徴に注意を払っていないし、全体としての空間も、個々の空間的性格を有する感覚から構成されると理解している。また、この個々の感覚は、心の外にあるものからの印象を基礎としているとされる(本稿Ⅲ-1を参照)。そ

れゆえテーテンスは、時間・空間の「超越論的観念性」を基礎としたカントの「超越論的観念論」とは相容れない立場をとる、ということになる。すなわちカントから見るならば、テーテンスもまた「超越論的実在論」をとる哲学者の一人なのである。

## 2 カントのテーテンス摂取

ではカントは、どのような仕方ですべての心能力の分析を「演繹論」の内に取り込んだのだろうか。結論から言うと、カントは、テーテンスの分析を、「三重の総合」の核心をなす、心能力の「超越論的使用」の理論とは区別したうえで、受け入れている。どういうことだろうか。

「演繹論」の課題は、認識の制約としてのカテゴリーの権利を確保することと理解されることが多い。しかしより厳密に言えば、経験的心理学が主題化する操作の基礎に、それを成立せしめる総合があり、さらにその制約として「すべての可能的認識の純粹形式」をもたらす「想像力の総合の超越論的な統一」(A118)があるということ、しかもそのどれもが同型的な構造をもつということ、このことを示すことが「演繹論」の課題なのである。「統一」という概念に定位して言えば、(個別の対象に関する)分析的な統一の基礎に、総合的な統一があり、さらにその基礎に超越論的統覚の統一が存するという基礎づけ連関が、「演繹論」において論証されなければならないのである。

「三重の総合」において登場する心能力は、「認識」、すなわち「比較され結合された表象の全体」(A97)に関わる分析的統一と総合的統一との間に成立する制約関係を論証するための、いわば蝶番の役割を果たしている。三つの「心能力」<sup>31</sup>、つまり感官、想像力、統覚は、「経験的な使用」と「超越論的な使用」を有するとされる(A94f. Anm.)。ここで「経験的」という語が意味するのは、既に与えられた認識内容を前提として働く、ということである。「演繹論」で三つの「心能力」を形容する「経験的(empirisch)」の概念は、例えば「知性の純粹な法則」と「経験的な法則」とが対比させられる場合(cf.A127f.)の「経験的」とは区別されなければならない。

「三つの主観的認識源泉 [sc. 感官、想像力、統覚]の各々は経験的なものとして、すなわち与えられた現象への適用において (als empirisch, nämlich in der Anwendung auf gegebene Erscheinungen) 考察されうるが、それらすべては、この経験的使用を可能にするア・プリオリな要素、あるいは基礎でもある。」(A115: 傍点は筆者による)。

感官、想像力、統覚に付される「経験的」は、表象の統一を「総合的」と「分析的」に分けた場合(cf.A79/B105)の、「分析的」に対応する。というのも分析的な操作に従事する一般論理学は、「認識のすべての内容を捨象して、どこからにせよ、他所から表象が自分に与えられることを期待する」(A76/B102: 傍点は筆者による)からである。

このような、経験的使用と超越論的使用の同型性を枠組みとする演繹論の議論において、テーテンスの『試論』で主題化された心能力の働きが、「心能力」の「経験的使用」の部分に位置づけられているのである。この同型性を枠組みとすることから、第一版に固有の「超越論的对象=X」の議論の必要性も裏付けられるだろう。テーテンスの認識論では、感覚能力、表象能力、思考能力という順番で認識の成立の機序が語られるが、その舞台となるのは表象である。この表象がたんなる仮象でないとすれば、この機序が説明されるなかには、外的客観との関係を説明するパート(第五試論。PhV. 373ff.)が必要となる。テーテンスの認識論の枠組みを「経験的使用」の側に取り込むことは、「超越論的使用」の側でも、外的対象の問題を主題化しなければならない、ということになるわけである。

テーテンスにおける「創作力(Dichtkraft)」に対応するものを、カントにおける心能力の経験的使用の内に見出すことはできない。すでに述べたが、テーテンスの「造形的創作力」は、想像力の「超越論的使用」において引き継がれている。このように、一方でカントは、テーテンスの理論を、

心の能力の「経験的使用」にはめ込み、他方、テーテンスが分析した認識能力のうち「総合」の役割を担うるものを、「超越論的使用」として捉えなおす、ということを行っている。カントとテーテンスがやっていることを無造作に同一視しないために、この点を明確に区別しておくことが重要である。

### 3 「演繹論」第二節の分析

では具体的に「演繹論」の議論を追ってみよう。第一版においてカントは「演繹論」を二つの部分に分けている。前半部はいわゆる「三重の総合」を含む第二節「経験の可能性のア・プリアリな根拠について」(A95-A114)であり、後半部は第三節「知性の対象一般への関係および対象一般をア・プリアリに認識する可能性について」(A115-A128)である。本稿では、テーテンスの影響が顕著である、第二節を取り上げる。

第二節は四つに分割されており、前の三つの部分がいわゆる「三重の総合」の議論をなしている。「三重の総合」は、①直観における把捉 (Apprehension) の総合、②想像における再生 (Reproduktion) の総合、③概念における再認 (Rekognition) の総合からなる。この議論の基本的な狙いは、「認識」、すなわち「比較され結合された表象の全体」(A97)の成立の制約を順次辿ることによって、最上の制約としての「カテゴリー」のステータスを確保することにある。

まず心の能力の「超越論的使用」に関係する三重の総合の機序を概観してみよう。各々の直観には多様が含まれる限りにおいて、何らかの全体的な表象がわれわれに与えられる場合、その全体的な表象は、内部において分節化されつつ統一されていなければならない。もしこの分節化がなされないならば、表象は「一瞬間を満たす」ような「絶対的統一」であり、多様を含まないものになってしまう。それゆえ感官が表象を一つの「全体」をなすものとして受け取る場合には、「多様な内容に目を通し、ついでそれを取りまとめる (das Durchlaufen der Mannigfaltigkeit und dann die Zusammennehmung desselben)」(A98)働きが必要である(「直観における把捉の総合」)。だが「把捉の総合」は単独では可能ではない。例えばAB、BC、CAの三辺からなる三角形ABCが総合される際<sup>32</sup>、ABからBCを経てCAに総合がいたるとき、AB、BCが再生されつつ総合されなければ、三角形ABCの全体は成立しえない(「想像における再生の総合」)。「再生の総合」もさらに高次の制約を必要とする。先の例でいうと、CAにおいてAB,BCが単に再生されるだけではなく、①必然的に、②同一の系列に属するものとして、③そして一瞬間前と同じ内容であることが認められなければ、「再生」は「再生」とはいえない。このように再生を可能にする働きが「再認」であり、総合に必然性を付与するものが「概念」である(「概念における再認の総合」)。三角形の例でいえば、三角形の概念が、全体としての三角形の表象を可能にする最も根本的な制約である。カントは以上のように、多様から出発して、制約としての「概念」の地位を確保する。

カントは「三重の総合」において単に「総合」の制約系列を辿っているだけではない。心の能力の「経験的使用」(分析的な統一が達成される局面)の制約として「超越論的使用」(総合的な統一が達成される局面)があるということも、この能力の分析を通じて論証されている。この「経験的使用」における三重の総合に、テーテンスの認識能力の分析の成果がぴったりと収まるのである<sup>33</sup>。

「直観における把捉の総合」においてカントは感官の超越論的使用の説明に終始しており、経験的使用については述べていない。しかし感官の経験的使用が分析的統一をもたらすとすれば、その内容は、与えられたものを前提とした、「多様な内容に目を通し、ついでそれを取りまとめる」(A98)働きであると考えることができる。これはテーテンスの、感覚受容の局面の描写(「手や足が動かされたとき、かなりの量の感覚が生じ、それらがまとまって、唯一つの感覚 (nur Eine [Empfindung]) を形成した」(PhV. 386f.))と重なり合う。「再生の総合」においてカントは、経験的

想像力の働きを、表象を再現し、諸表象を規則に即して結合すること（いわゆる「観念連合」）にあるとする。テーテンスもまた、想像力に「再生 (Reproduktion)」(PhV. 106) の役割を担わせており、「観念連合」(PhV. 108) をその所掌事項としている。

「想像における再生の総合」において、経験的な想像力の使用と、超越論的な想像力の使用は構造的にびたりと符合しているわけではない。前者はむしろ、それが踏まえるべき規則を介して「再認の総合」に関係づけられるものである。後者は、「一本の線を頭の中で引く」(A102) という作図をモデルとした総合において、先行する総合のプロセスを維持しておく働きとして登場するからである。こういったズレが生じるのは、「想像における再生の総合」が、把握・再生・再認の制約系列の中間地点をなすとともに、「経験的」と「超越論的」との間にある制約関係の確保を狙う部分でもある、というそこに負わされた二重の役割から理解すべきであろう。

「概念における再認の総合」において、「全体」としての認識の成立のための第三の（存在根拠としては第一の）制約が「概念」に見定められる。だがカントがこのパートで狙っているのは、単に概念を第三の制約として確認することにあるのではない。カントの狙いは、「意識の統一」、「概念」、「対象との関係」のそれぞれが、〈認識のア・プリオリな規定〉のための制約として機能しているということ、もう少し厳密に言えば、この三者が〈客観的妥当性を有する認識が成立するための制約〉をそれぞれ別の側面から表現していることを示すことにある。この議論は、「可能的経験」の制約としての「超越論的統覚」、「カテゴリー」、「対象一般」の三者の連関を明らかにするための準備作業になっている。

この議論の構成契機に着目すると、これとテーテンスの客観の理論との関係が見えてくる。先に述べたように、テーテンスの分析によると、思考能力が発動するステージにおいて、自我 (Ich)、関係概念と相関的に、客観の概念が成立する。テーテンスにおいては、自我は感覺能力、表象能力を踏まえて成立するものであるので、これは「分析的統一」であり、カントからすれば「経験的使用」に位置づけられることになるが、構成要素は「超越論的使用」と同型的である。カントは、上述の三要素を意識の統一、概念、超越論的对象 = X へと読み替えて、統覚の「超越論的使用」の道具立てとし、個々の認識対象の成立の機序を説明する。さらに考察の射程を「一つの経験 (eine Erfahrung)」の成立へと拡張し、超越論的統覚、カテゴリー、対象一般という三契機を、その議論の支えとして用いるのである。さらにここで、テーテンスが客観の概念の成立にあたって「一つの、特殊な全体的感覺 (Eine besondere ganze Empfindung)」(PhV. 390 : Eine は大文字表記) を問題としていたこと、思考能力の端緒を「統覚 (Apperception)」(PhV. 262) に定めていたことを、改めて指摘しておこう。

「超越論的对象」に関する議論は「諸表象の対象という表現で何が意味されているのか」という問いに立脚して展開される。まず個別的な対象に関する問題およびそれに対するカントの解決を確認したい。「認識」は「比較され結合された諸表象の全体」(A97) であるかぎりにおいて、「表象の対象」とはあくまで区別される何かでなければならない。そして表象の外部は、認識されえず、われわれにとって何物でもないから、「あるもの一般 = X (Etwas überhaupt = X)」(A104) としてのみ思考せざるを得ない。このように「諸表象の対象」自体が直接的に把握されえない以上、カントはそれが認識の成立において有する位置値（すなわち〈意味〉）からその内実を捉えるという方策を採る。「ある認識が対象と連関している」といわれる場合、実際にそこで意味されているのは、その認識が、その対象についての概念のもとで統一されているということ、そして認識の内容が任意なものではなく「ア・プリオリにある種の仕方規定されている」(ibid.) ということである。しかし認識のもとで確認される必然的な統一とは、実際のところ「それらの諸表象の多様なものの総合における意識の形式的統一」以外のなものでもない。認識の対象とは、その対象についての認識を必然的な

ものにする意識の統一の「相関物」として理解されるべきものなのである。

カントは個々の対象における総合の分析を踏まえた上で、カテゴリーの演繹そのものに踏み込む (cf. A106ff)。カントが「いまやわれわれは対象一般についてのわれわれの概念をも、より正しい仕方 で規定することができる」(A108)と述べるのは、個々の意識の形式的統一の「根源的、超越論的根拠」として「超越論的統覚」が要請され、それによってもたらされる「法則に即したあらゆる表象の連関」(A108)が議論の中心になる箇所においてである。この対象一般についての議論は、特定の認識における表象の対象と意識の統一との関係とパラレルなものとして理解することができる。要するに「対象一般」とは、超越論的統覚の「相関物」として、超越論的統覚が統一するすべての表象が属する一つの連関、すなわち「そこにおいて、すべての知覚が汎通のかつ合法的に連関づけられたものとして表象される一つの経験」(A110: 傍点部ゲシュペルト)が成立するための、一つの契機として機能しているのである。ここにおいて「対象一般」は、「一つの経験」という可能的な全体を成立させる認識構造の一要素としてのステータスを与えられている。カテゴリーは「対象一般についての概念」と呼ばれるが (cf. B128, A290/B346)、それはカテゴリーが「一つの経験」においてすべての知覚を汎通のかつ合法的に連関づけるところの、最も基礎的な「規則」の役割を果たすからにはかならない。

個々の認識における総合的統一と「一つの経験」における統一とが同一の構造を有するということは、前者における諸制約「意識の統一」、「概念」、「対象 = X」の位置に、「超越論的統覚」、「カテゴリー」、「対象一般/超越論的对象 = X」がそれぞれ見出されることによって裏付けられる。そしてこの構造的符合が確保されているからこそ、「可能的経験一般のア・プリオリな諸条件は同時に経験の諸対象の可能性の諸条件である」(A111)という主張が可能なのである。

おわりに

以上の考察を通じて、①カントは、テーテンスの『試論』を踏まえて、「演繹論」の三重の総合を叙述していること、②『試論』で主題化される心の働きは、心の能力の「経験的使用」として「演繹論」のなかに取り込まれていること、③テーテンスの「創作力」は、想像力の「超越論的使用」において引き継がれていること、が明らかとなった。論述の構造上の一致や用語上の類似の指摘の先にある問題、すなわち〈カントがどのようにテーテンスの認識能力分析を取り込んだか〉という問いに、一定の仕方 で解答を与えることができた と考える。

では、カントがなぜ『批判』の第一版で、心の能力の「経験的使用」と「超越論的使用」を、同型的なものとして示さなければならなかったのだろうか。この問いには、さしあたり三つの答えを出すことができるだろう。

第一に、カテゴリーの「形而上学的演繹」の妥当性を確保するという狙いが考えられる。カントは、判断表からの導出されたカテゴリーが認識の制約となりうる理由を、次のように説明している。

「一つの判断において様々な表象に統一を与えるのと同じ機能が、一つの直観において様々な表象の単なる総合にも統一を与える。そしてこの機能は、一般的に表現するならば、純粹知性概念とよばれる。それゆえ、同じ知性が、しかもその知性が概念において、分析的統一を介して、判断の論理的形式をそれによって成立させたのとまさに同じ働きを通じて、直観一般における多様の総合的統一を介して、おのれの諸表象のうちへと超越論的内容をもたらしもする…。」(A79/B105f: 傍点部ゲシュペルト)。

先に述べたように、心の三つの能力の経験的使用における「経験的」とは「与えられた現象への適用における」(A115)という意味であり、この点で一般的論理学の操作と性格を共有する。つまり

心の能力の「経験的使用」とは、判断の論理的形式を成立せしめる働きである。このような性格を持つ「経験的使用」が、「超越論的使用」と同型的な構造を有することを裏付けることができれば、上の引用で述べられている内容が実質化され、「形而上学的演繹」の妥当性が確保される、ということになる。

次に、形而上学的誤謬に関係する狙いがあると考えられる。カントの考えによれば、「総合」の局面を飛び越し「与えられた現象」を前提して形而上学の問題に取り組むと、人間は不可避免的に誤謬に陥る<sup>34</sup>。カントは、認識を成立せしめる知性の機能と、それに条件付けられる知性の機能（一般論理学が提示する制約）が同型的であることを示すことによって、形而上学的な誤謬の根源が他ならぬ「理性」である、ということを示すことを裏付けようとした。誤謬を犯すのも、客観的妥当性を確保するのも、同じ理性である。理性は、認識の客観的妥当性を確保しえたとしても常に、誤謬を犯す可能性と隣り合わせである。このことを明らかにすることによって、カントは形而上学の誤謬の根深さを示したのである。

最後に—これは第二の狙いときわどい関係にあるのだが—、同世代の哲学者と共に新たな形而上学を構築する、という計画との関係が指摘できる。カントは『批判』第一版の出版時、そして少なくとも『プロレゴメナ』の出版時までには、こういった構想を抱いていた（cf. IV 382）。そのためにも、『批判』第一版のカントは、同世代の哲学者と共有できる地平のもとで、論述を進める必要性を感じていたように思われる<sup>35</sup>。『批判』第一版出版後の三通の書簡で、カントは、新たな形而上学の構築に参加してほしい哲学者として、テーテンスの名を挙げている（cf. X 270, 341, 346）。しかしテーテンスは『批判』に対して、表立った仕方ではコメントをすることはなく、カントを落胆させた（cf. X 341, 346）。『批判』第二版（1787）になるとこの形而上学構築の計画は影を潜めるのだが、これに呼応するかのように「三重の総合」の部分は削除される。三重の総合は、『批判』第一版に固有の、形而上学に関する共同作業の構想と結びついて意義を持つ可能性がある。

第二、第三の点を考慮に入れることによって、『批判』の書き換えの解釈に、新しい方向性が開かれるように思われる。すなわち、「改訂によって、カントの思索はどのように進展したのか」という従来の問い方ではなく、「改訂によってカントは何を断念したのか」という問い方が見えてくる。この解釈の可能性を提示できたことを、もうひとつの本稿の成果として示しておきたい。

（付記）本稿は文部科学省科学研究費補助金（課題番号24720014若手研究（B））の交付を受けて行った研究の成果の一部である。

## 【注】

<sup>1</sup> カントからの引用には、アカデミー版カント全集の巻数（ローマ数字）と頁数（アラビア数字）記す。ただし『純粹理性批判』からの引用は、A版＝第一版とB版＝第二版の頁数を記す。

<sup>2</sup> J. G. Hamann, *Briefwechsel*. Bd.4 1778-1782, hrsg. von A. Henkel, Wiesbaden 1959, S.81.

<sup>3</sup> 以下のものを『試論』の底本として使用した。J. N. Tetens, *Philosophische Versuche über die menschliche Natur und ihre Entwicklung* : Ders. *Die philosophischen Werke* Bd I. Hildesheim 1979.

<sup>4</sup> 『試論』はカントの蔵書リストにも載っており（cf. A. Warda, *Immanuel Kants Bücher*, Breslauer 1922）、書き込みもなされている（cf. XVIII 5, *Refl.* 4847）。またカントが『試論』を丁寧に読んだことが伺える書簡もある（cf. X 232）。

<sup>5</sup> 本稿では、カントとカント以前の哲学者との繋がりを可視化するために *Einbildungskraft* を想像力、*Verstand* を知性と訳する。

<sup>6</sup> H.J.de Vleeschauwer, *La déduction transcendentale dans l'œuvre de Kant*, t.1, Antwerp 1934, p.284-329; L. W. Beck,

*Early German Philosophy*, Bristol 1969, p.425.

- <sup>7</sup> 比較的最近の論文でも、この点が明らかにされているとは言いがたい。Cf. H.-U. Baumgarten, *Kant und Tetens. Untersuchungen zum Problem von Vorstellung und Gegenstand*. Stuttgart 1992 ; W. Carl, *Der schweigende Kant. Die Entwürfe zu einer Deduktion der Kategorien vor 1781*, Göttingen 1989; 山本道雄「認識における二つの伝統——カントとテテンス」『カントとその時代』晃洋書房、2008年、286-305頁; A. N. Krouglov, *Tetens und die Deduktion der Kategorien bei Kant*, in: *Kant-Studien* 104 (4), 2013, S. 466-489.
- <sup>8</sup> 『一般思弁哲学について』(1775)が『批判』に与えた影響については、拙稿「テテンス『一般思弁哲学について』とカント」、『香川大学教育学部研究報告第1部』第139号、2013年、145-162頁、および「テテンスとカント—超越的／超越論的をめぐる」、日本哲学会編『哲学』第66号、2015年、141-156頁、を参照。
- <sup>9</sup> 以下のものを『思弁哲学』の底本として以下を使用した。J.N. Tetens, *Ueber die allgemeine speculativische Philosophie*, in: Ders., *Die philosophischen Werke*. Bd.IV. Kleinere Schriften, Teil 2, Hildesheim 2005, S.1-94.
- <sup>10</sup> 山本、前掲論文、304頁。
- <sup>11</sup> Cf. J.Engfer, Einleitung, S. XXII in :J.N.Tetens, *Die Philosophischen Werke*. Bd.III. Kleinere Schriften, Teil 1 Hildesheim 2005.
- <sup>12</sup> 同じ方向性を有する解釈として以下を参照。Cf.J.Engfer, *Selbstbeobachtung und Vernunfttheorie bei Tetens*, in : H.Poser (hrsg.) , *Erfahrung und Beobachtung*, Berlin 1992, S.121-141; M. Puech, *Tetens et la crise de la métaphysique allemande en 1775*, in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 117e Année-Tome CLXXXII (1992) , p.3-29.
- <sup>13</sup> M. Frank, *Selbstgefühl. Eine historisch-systematische Erkundung*, Frankfurt a.M. 2002, S.200ff.
- <sup>14</sup> U. Hölscher, *Urkundliche Geschichte der Friedrichs-Universität Bützow*, in: *Mecklenburgische Jahrbücher* 50 (1885) , S.71.
- <sup>15</sup> Cf. Chr. Hauser, *Selbstbewußtsein und personale Identität: Positionen und Aporien ihrer vorkantischen Geschichte; Locke, Leibniz, Hume und Tetens*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1994, S.134.
- <sup>16</sup> Chr. Wolff, *Discursus praeliminaris de philosophia in genere*, § 112, in: *Philosophia rationalis sive Logica, methodo scientifica pertractata. Praemittitur discursus praeliminaris de philosophia in genere*, Frankfurt u. Leipzig 1728<sup>1</sup> 1740<sup>3</sup>.
- <sup>17</sup> Cf. Chr. Wolff, *Psychologia empirica* (1738) : Ders. *Gesammelte Werke*, II Abteilung, Bd.5, herausgegeben und erarbeitet von J. Ecole, Hildesheim 1968, s.721.
- <sup>18</sup> 以下の整理をするにあたって、特に次の文献を参考にした。Vleeschauer, *op.cit.* p.299sq. W. Uebele, *Johann Nicolaus Tetens nach seiner Gesamtentwicklung betrachtet, mit besonderer Berücksichtigung des Verhältnisses zu Kant*. Berlin 1911, S.111ff.
- <sup>19</sup> Uebele, *op.cit.* S.118.
- <sup>20</sup> G.W. Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement par l'auteur du système de l'harmonie préétablie*, in: *Die philosophischen Schriften* 5, Berlin 1882, p.129; R. Descartes, *Meditationes de prima philosophia, in quibus Dei existentia, & animae humanae a corpore distinctio, demonstrantur*, in: *Œuvre de Descartes*, vol. VII , publiées par Ch. Adam et P. Tannery, Paris, 1996. p.28.
- <sup>21</sup> J. Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, ed. by P. H. Nidditch, Oxford, 1979, p.596.
- <sup>22</sup> G. Berkley, *A Treatise concerning the Principle of Human Knowledge*, ed. by J. Dancy, Oxford, 1998, p.94.
- <sup>23</sup> 杖下隆英『ヒューム』勁草書房、1982年、37頁以下参照。
- <sup>24</sup> この点の詳細については、拙稿「定義・図式・像—純粹理性批判」「図式論」の役割とその哲学的的位置について—」『香川大学教育学部研究報告第1部』第135号、2011年、73-87頁を参照。
- <sup>25</sup> 「関連、関係の感取」はすべて「移行 (Übergang)」に還元されるわけではない。これについては、第二試論第四節を参照 (cf. PhV. 191ff.)。
- <sup>26</sup> この概念はライプニッツに由来するものであるが、ヴォルフ学派を通じてテテンスの用語の中に入ってきた



たものと考えられる。以下参照。山内志朗「ライプニッツの影響 *apperceptio* をめぐって」廣松渉ほか編『講座ドイツ概念論第一巻＝ドイツ概念論前史』弘文堂、1990年、67-122頁。

<sup>27</sup> G.W. Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement*, p.129.

<sup>28</sup> D. Hume, *A Treatise of Human Nature*, Second Edition with text revised and notes by P.H.Nidditch, Oxford 1978, p.252.

<sup>29</sup> Cf. Vleeschauer, *op.cit.* p.313.

<sup>30</sup> この点の詳細については、拙稿「定義・像・図式－「純粹理性批判」 「図式論」の役割とその哲学的的意義について－」を参照。

<sup>31</sup> ここで「心」と訳したものの原語は *Gemüt* である。テーテンスでは、*Gemüt* という語はほとんど用いられず、カントが *Gemüt* と用いるところでも、*Seele* という語を使う。弁証論まで視野に入れると、区別が必要になると思われるが、本稿では両方とも「心」と訳した。

<sup>32</sup> 三角形の例は、高坂正顕『カント』理想社、1977年(1939年初版)、116頁以下より。

<sup>33</sup> 以下の論述では、特に次の文献を参考にした。Vleeschauer, *op. cit.*, p.320sq.

<sup>34</sup> 拙稿「区別 (*Unterscheidung*)」と「混同 (*Verwechslung*)」－「フェノメナとヌーメナ」と「反省概念の二義性」の役割分担について－」日本カント協会編『日本カント研究9 カントと悪の問題』2008年、123-140頁を参照。

<sup>35</sup> このことは、「弁証論」の「誤謬推理」章の書き換えに関してもいえる。拙稿「「誤謬推理」章における批判の方法について」日本カント協会編『日本カント研究11 カントと幸福論』2010年、79-94頁を参照。

## Tetens' "*Philosophische Versuche über die menschliche Natur und ihre Entwicklung*" und Kant

Keita SATO

Durch mehrere Studien ist es belegt, dass Kant Tetens' "*Philosophische Versuche über die menschliche Natur und ihre Entwicklung*" (1777) bei der Abfassung der "*Kritik der reinen Vernunft*" (1781) beständig konsultiert hat. Aber in den bisherigen Interpretationen ist die Frage noch immer umstritten, wie Kant Tetens' Erkenntnislehre in der *Kritik* übernommen hat.

Dieser Aufsatz versucht, den Einfluss von Tetens' Epistemologie auf die Deduktion der Kategorien in der *Kritik* durch eine eingehenden Untersuchung von den *Philosophischen Versuchen* zu klären. So wird deutlich, dass Kants Lehre von der "dreifachen Synthesis" im Deduktionskapitel auf der Erkenntnistheorie in den *Philosophischen Versuchen* basiert. In diesem Kapitel liefert Kant einen Beweis für die Gleichförmigkeit des "transzendentalen Gebrauchs" der Gemütsvermögen und des "empirischen" und erklärt diesen nach Muster der von Tetens analysierten Wirkungen der Erkenntniskräfte. Der "empirische Gebrauch" ist nun sowohl der Ursprung der Urteilstafel als auch der Nährboden von transzendentalen Realismus (cf. "von der Amphibolie der Reflexionsbegriffe" A260ff. /B316ff.). Durch diese Konstruktion der Deduktion legt also Kant es darauf an, die Gültigkeit der Ableitung der Kategorien aus der Urteilstafel zu beweisen und zugleich den Grund für die Unvermeidlichkeit des metaphysischen Irrtums anzugeben.